

公益の風 #51

東北公益文科大学 教授

星 宏 人



私は今年四月に東北公益文科大学(以下「公益大学」)に着任しました。私の研究分野は言語学・英語学です。近年は、他者とのコミュニケーション(言語運用)においてヒトが心の中に順次どのようにに統語・意味構造を創り出しているのか、そのプロセスに注目して研究しています。言語運用のプロセスを完全に捨象してヒトの言語の特徴を明らかにしようとするNoam Chomskyの生成文法理論に対して、ヒトの文法性判断等の言語の重要特性を解明するためには言語運用のプロセスこそ目を向けるべきだという立場を私は取っています。

公益大学就職にあたり、特に大学院公益学研

公益大国際学部で「日本手話科目」を開講します

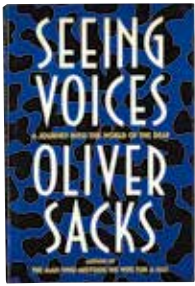
究科長の武田真理子先生(専門:社会政策、福祉まちづくり)から公益大学の使命等に関して大変丁寧で詳しい説明を頂き、「いつの日か公益大学で日本手話科目を開講したい。ヒトの言葉には英語や日本語のような健聴者の話し言葉だけでなく、ろう者の言語である手話もあり、手話は言語の豊かなダイバーシティの大切な一部であるということを庄内からも全国に発信したい」と思うようになりました。

実は私は米国コネチカット州立大学大学院に留学していた時にアメリカ手話に出会い、次のようなことを学び、衝撃を受け、アメリカ手話の音韻論に関する修士論文を執筆しました。(1)アメリカ英語(話し言葉)とアメリカ手話は全く異なる文法構造を持つ、(2)アメリカ英語(話し言葉)とイギリス英語(話し言葉)は発音にこそ多少のバリエーションはあるが、文法構造にはほとんど違いはない。しかしアメリカ手話とイギリス手話は語順等も著しく異なり、全く異なる文法構造を持つ、(3)日本語(話し言葉)と日本手話も文法構造が全く異なる、(4)ヒトは話し言葉を使う際には、心の中にメッセージ等を発音器官を使って出力

し、聴覚器官を使って入力する一方、手話を運用する際には、心にあるメッセージ等を手指、体の動き、顔の表情を使って出力し、視覚器官を使って入力する、(5)つまり、話し言葉と手話はそれぞれ独自の特性を持っているものの、ヒトの心の中にあるメッセージ等のやり取りの際に使う身体器官が異なるだけで、同等の言語のメカニズムを用いる、同等の人間言語である。

日本手話科目開設のためには各種委員会、学部長、学長への相談、更に講師探しなど、実現までには数年かかるだろうと思っていました。が、覚悟を決め早速、武田先生に相談したところ、その日のうちに武田先生が神田学長に伝えて下さり、その約一週間後には来春新設される国際学部のための会議で科目開設のための講師を採ることになりました。

私には秋田市ろうあ協会に知り合いの先生がいるものの、可能ならば庄内でと、武田真理子先生、澤邊みさ子先生(専門:障害者福祉)、白畑真由美先生(専門:児童・



写真は神経内科医 Oliver Sacks による『Seeing Voices: A Journey into the World of the Deaf』(『声を見る: ろう者の世界への旅』、1989年)の表紙です。アメリカで修士論文を執筆していた頃に購入しました。

家庭福祉)が連携、協力して下さり、澤邊先生が数日のうちに庄内地方在住の先生(ろう者)と公益大学大学院公益学研究科修士生で手話通訳士の先生(健聴者)を探して下さいました。更に澤邊先生は自身が要となり3人で日本手話科目を担当して下さる計画のシラバスも作成して下さいました。東京大学、慶應義塾大学でも日本手話科目を開講していますが、私が知る限り、このように理想的な教員3人体制で日本手話を教えている大学は現時点で日本に一つもありません。

私は科目開設を提案しただけで恐縮するばかりですが、来年度日本手話科目を開講できることとなり、学長、研究科長、教員、事務職員の公益への思い入れの強さと一丸となって実行に移す力に誇りを感じております。将来は私も日本手話科目のために自分にできることをし、ニュージブラン同様日本でも「手話を公用語とする」流れを公益大学から生み出す一助になることができればと考えております。

荘内日報社「敬天愛人」2025年10月号 (Vol.199) 掲載